
バキュームな目覚め

菜宮 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バキュームな目覚め

【Nコード】

N8658F

【作者名】

菜宮 雪

【あらすじ】

殿様は、通りかかった森の中で、眠る女に出会います。女を守る、七人の小人たちに促され、女を目覚めさせようと……白雪姫の設定を一部借りたパロディですが、原作からかけ離れています。

「下にいゝ、下にいゝ」

大名行列が通って行きます。ぞろぞろと進んでいく行列の真ん中辺りに、殿様の乗った駕籠かじがありました。その駕籠のところへ、先頭を歩いていった旗持ちの家来が、飛ぶようにやってきました。

「殿、前方の森の中に、なにやら怪しげな女がいるとの情報が入りました。私が、この目で確認しましたが、どうやら、異国の女のようでございます。いかがいたしましたでしょうか」

駕籠の中の殿様は、なんだ？ といったん行列を止めさせ、出てきました。まだ若い二十代後半に見える男性です。

「怪しげな女とは何事ぞ。行列の前を横切るような無礼者は、斬り捨てよ」

「横切ったわけではございません。その女の様子がおかしいのでございます。その供の者も普通ではなく――」

家来の報告に、殿様は、自分の目で確かめることにしました。そこは、小さな集落を過ぎ、民家のない森林地帯への入口にあたる場所でした。殿様は、その場に大半の家来を休ませておいて、数人の家来とともに、怪しい女の元へ向かいました。

女は、森に入ってすぐの、道の脇で眠っていました。

「怪しい女、とはこれのことか」

道沿いにある大きな木の下、地面に敷かれた毛布の上には、白い服を着た、まだ若い女があおむけになって目を閉じています。真っ白な服。死に装束にしては派手で、細い糸を編んだような房飾りが多数ついており、腰から下の生地が膨らんだ、見たこともないような形の着物を身につけています。頭には、三角巾のようなものがかぶっています。三角巾ではなく、かぶりものの丈は長く、薄く透けた生地に、あさがおの花の模様似た、大きな地模様がありま

す。明かに異国の生地。そして、殿様が驚いたのは、女の髪色。日が当たれば、白髪かと見間違えるほどの、それは明るい黄金色でした。

「なんだ、この変な女は。確かに異国の女だな。どこから来た」

怪しい女は返事をしません。ぐっすりと眠ったままです。女の傍には、茶色のおそろいの服を着た家来が七人付いていました。女が起きないので、殿様は、女を守るようにしゃがんでいた、家来らしき者たちに同じ問いをしようとしたが、その家来たちをしつかり見たら、思わず、違う言葉が口から出てしまいました。

「誰か、ゴキブリ団子を持ってまいれ！」

その言葉に、女の家来たちは、むっ！と反応し、殿様をにらみつけました。女の家来たちは皆、しゃがんでいるわけではなかったのです。彼らの背の高さは成人男性の太ももほどしかなく、背中の割れた茶色いマント姿でした。帽子も茶色で、それには触覚のような、細い角飾りが二本ついていたので、殿様は、大きなゴキブリがわいている、と思ってしまったのです。ゴキブリに似た服を着た、女の家来たちは、殿様を見て、口ぐちに、叫びました。

「ゴキブリじゃない！ お姫様が大変なんだ。王子様を連れてきてよ」

殿様は、まぶたをぱちぱちと何度も動かしました。この異常に小さな男たち、というか、たぶん男だろうと思われる人間たちが、言っている意味がわかりません。

「おうじ……とは何ぞや？ このゴキブリ軍はこの藩の者か？」

殿様の問いに、ゴキブリ人間の隊長らしき丸顔の男が、前へ出てきて言いました。

「てめえ、王子も知らねえのか？ 姫を目覚めさせるのは王子と決まっているだろうが、このボケェ。おい、王子はどこにいる。わざわざ遠い国から姫を連れて来てやったんだ。王子の居場所を教えろよ」

横柄な物言いに、殿様は、まゆをつりあげて、真っ赤になりました

た。しかも、このゴキブリの隊長は、殿様が大嫌いだったある男の顔に似ていました。残酷そうな薄い唇や、肉つきのない鼻筋などがそっくりだったのです。それがよけいに怒りを呼び、殿様はあまりのことに、ただでも大きめの鼻の穴が広がってしまいました。

「おうじとは、何のことかわからぬ、と言っておるではないか。失礼な異国人など、手討ちにしてやる！」

殿様は、腰につけていた刀のつかに手をかけました。その様子に、ゴキブリ人間たちは、これはまずい、と思ったらしく、横柄な言い方をした隊長の口を押さえ、慌てて後方へひっこめました。隊長のゴキブリ人間は、不服そうに、自分をつかんだ同士をにらみつけました。

「隊長、我慢してください。そうでないと殺されます。私たちがここまで来た意味がありません。姫様の為です」

隊長は、それでもまだ、ぎゅうぎゅう言っていました。他の者におさえこまれてとりあえずおとなしくなりました。今度は、隊長とは別のゴキブリ人間が、前に進み出て言いました。

「大変失礼しました。王子様とは、国の王様の息子のことです。お告げによると、私たちの姫を目覚めさせることができるのは、この国の王子だけらしいので、海を渡ってここへ連れて来しました。王子のいる城はどこにあるのか、教えていただけませんか」

あつけにとられた殿様でしたが、ペコペコと頭をさげられて、少し気を取り直しました。

「城はたくさんあるが……つまりは、王子とは、城主の息子のことか？ それなら自分がそうだが」

ゴキブリ人間たちは、パツと目を輝かせました。

「わーい！ 王子様が見つかった！ 白い馬に乗ってないけど、まあいいや」

小さな人々は、大喜びで手を取りあい、輪になってその場で踊り始めました。殿様は眉をひそめました。

「……おい、何を喜んでおるのだ。女は眠ったままだぞ」

「ささ、王子様、どうぞ、姫さまに、アレをお願いします」

「アレとは？」

「アレ、と言ったらアレですよ」

小人たちは、ポウツと頬を染めました。やはり意味がわからない殿様は、もう一度同じことをたずねました。

「アレとは？」

「ですから、その……姫様に近づいて、姫様の唇に……ああっ、そんな恥ずかしいこと言わせないでください」

踊っていた一人が、自分の口先を尖らせて、音をたてて見せました。そして、どうぞ、どうぞ、早く、と殿様をうながします。殿様は、また眉根を寄せました。

「この女に接吻せよ、と申すか。どうしてだ」

「そういう決まりですから。王子様は、お姫様を目覚めさせて、結婚する運命なのです。姫様のお召しになっているこれは、結婚用の衣装でございます」

「なぬっ？ この女と自分が婚礼？ 異国の女など興味はない。くだらぬことで、行列の足を止めてしまった。戻るぞ」

殿様は、眠る女にくると背と向け、家来を従えて戻ろうとしました。喜んでいた七人の小人たちは、踊りをやめ、顔色を変えて、殿様の足に次々に飛びつきました。

「お待ちください。まだ姫様が目覚めてないから、決まり通りにやっていただかないと困ります」

とりすがる小人たち。かわいい手が、しっかりと足にまとわりつき、これでは殿様は歩けません。

「ええいっ、放せ！ 放さぬか！」

「ひいい、王子様どうか、お静まりください」

ゴキブリのようなこの人たちは、殿様にしぶとくしがみついています。全員を、斬り捨てるのも後味が悪いので、殿様は仕方なく、アレをすることにしました。

「わかったから、放せ」

小人たちは、パツと放してくれました。殿様は、眠る女に顔を寄せ、軽く唇を重ね合わせました。

「これでよいだろう。おまえたちの言う通りにしてやったぞ。死人のような女に接吻しても、おもしろくもなんともない。つまらぬ」

「お、お待ちください。もう一度、お願いします」

「んん？　もう嫌だ。この女を起こしたいなら、おまえたちで冷水でもかければよからう」

「そういうわけにはいかないのです。王子様が姫を目覚めさせることで姫様の呪いがとける、と本に書いてあるのですから」

「異国の本など知らぬ」

「そんな」

小人たちは、再び殿様にとりつきました。

「むうう、何をする」

「姫様が目覚めなかったので、どうかもう一度アレしてください」
「しつこいわ」

殿様は、しがみついている小人たちを振り落とそうと、体をブンブンと左右に振りましたが、小人たちは、そうはさせるか、と必死で、放してくれません。

「放せ！　このっ、殺すぞ！」

「あひい、王子様、お願いでございますから、もう一度」

「いいかげんにしてくれ。うるさいやつらめ。それなら、俺がその女に水をぶっかけてやろう。それで目が覚めれば、文句はないな？」

「はい。姫様がお目覚めになれば、それでいいのでございます」

小人たちは、笑顔になって殿様から手を放しました。殿様は、付いて来ていた自分の家来に、水を持って来させました。眠っている女に近づき、その顔に、桶に入れられた水を、ジョボジョボ……

季節は冬の入口でした。持って来られた水は凍っているわけではありませんでしたが、それは近くを流れる川の水で、どう考えても冷たいに決まっています。どんなにぐっすり眠っていても、気がつかないはずはありません。額や鼻の頭、それに頬へと、落とされた

水が、髪の中へ流れて行きます。ところが、異国の女は眉ひとつ動かさず、穏やかな寝息をたてています。

「ええい、これでも目が覚めぬなら、これならどうだ！ それいっ！」

殿様は、次々に水を運ばせて、とうとう女の全身をずぶぬれにしてしまいました。小人たちは、姫を目覚めさせるためなら多少のこととは仕方がないと、殿様のやることを黙って見ていました。

「どうだ。起きないか？」

五回ほど、水かけをやった殿様は、かがんで女を覗き込みました。全身に水をかけられ、真っ白な花嫁衣装のドレスは、ピタリと体に密着し、その下にある体の線をはっきりと示しています。胸に浮き出た、ピンクの頂上のある二つの丸い山。殿様は、ぬれそぼった、異国の女のなまめかしい姿に、ゴクリ、と唾を飲み込みました。

「気が変わった。この女を城へ連れて帰ろう」

小人たちが喜ぶかと思ったら、それは間違いでした。小人たちは、皆、首を横に振りました。

「それはだめです」

「どういうことだ。この女は、俺が娶ることに決まっておると、さっきおまえたちが言ったのだぞ」

「あの……申し上げにくいのですが、姫様がお目覚めにならなかったのならば、残念ながら、あなた様は私たちの探している王子様ではなかった、ということです。私たちは次の王子様が通るまで、ここで待たなければなりません。本当のお相手になる王子様が来るまでずっと」

殿様は、太いまゆげをぴくりと動かししました。

「おい……おまえたちが、アレしろ、と言うから、してやったのになんだ。この女は俺のものだ。俺の城へ連れていくぞ。俺はおまえたちの言うとおりにした。だから、今度は俺の言うことを聞いてもらう。文句はなからう」

殿様の強い口調に、小人たちは、どうしよう……とお互いに顔を

見合わせました。殿様に逆らえば、みんな殺されてしまうかもしれません。殿様は、付いて来ていた、家来たちに命令しました。

「この女を運んで、駕籠かごに乗せろ」

それを聞いた小人の隊長が、殿様の前に立ちはだかりました。それは、さきほど失礼な口をきいた小人で、今回もふんぞりかえって、無礼極まりない言い方をしました。

「てめえがちゃんと起せば、姫はくれてやる。それが嫁入りの条件だ。姫を目覚めさせることもできねえくせに、偉そうに、『俺の言うことを聞け』だど？ 無能のてめえなんか用はない。とつとと失せやがれ、くそやろう」

「なんだとお、この無礼者。もう許さん。そのふざけた面で、二度と俺を笑うことができないようにしてやる！」

殿様は腰につけていた刀を抜きました。とりゃああ、という掛声と共に、振り回された刀は小人たちをばさばさ斬り、後には彼らが身につけていた、茶色い服だけが残されました。服には中身はありませんでした。殿様に斬られて、人間だけが消えてしまったようです。殿様は不思議に思いましたが、これで邪魔者はいなくなったので、ゴキブリ人間たちの謎は気にせずに、眠ったままの異国の女を駕籠へ乗せるように、家来たちに命令しました。

殿様は、自分の城へ帰ると、異国の女を自分の寝室にしている部屋に運ばせました。女は、城の下働きの手によって、長じゅばん姿に着替え済みです。

「うむ。こうしてじっくりと見ると、なかなか美しい女ではないか。気に入ったぞ。いい拾いものをした。どれ、目覚めさせてやろう」

殿様は、女の頬をなでると、唇をそつと重ねました。やはり、女が目覚める様子はありません。そこで、殿様は、手のひらで女の口と鼻を押さえました。そのまましばらく様子を見てから、再び手をどけて、呼吸させます。呼吸が苦しくなれば、目覚めるかもしれないと思ったのです。殿様はそれを数回繰り返しました。呼吸をさ

またげられた女は、わずかに体をよじったものの、目を覚ますことはありませんでした。

「絶対に目覚めさせてやる。やはり、接吻でないと目覚めぬか。それなら、もっと強く――」

殿様は、大きく息を吐くと、思いきり女の唇を吸いました。

「むううう……だめか。もう一度だ。うんん……」

数回吸うのをやった後、女の顔を見下ろすと、その唇はすでに赤く腫れ上がっていました。それでも、殿様はあきらめませんでした。殿様の顔も真っ赤になってきました。

「んむむむ……おお！」

やがて、殿様の眼尻に喜びのしわが入りました。努力の甲斐あって、女はついに目を開きました。その瞳の色は、異国人にありがちな青ではなく、殿様と同じような、黒でした。金色の髪と眉に、黒い瞳。ぱっちりとした二重瞼で、とても澄んだ美しい瞳が殿様を見上げています。

「よくぞ目覚めた。そなたの名は何と言う」

目覚めた女は、それには答えず、覆いかぶさっていた殿様を、いきなり蹴り飛ばしました。ひざ蹴りが殿様の股間に入り、殿様は顔をしかめて急所をおさえて、床に転がりました。

「くっ、このっ、なにをする、無礼者！」

殿様は、苦痛で背中を丸めながら、女をにらみつけました。女はゆっくりと上半身を起こしました。

「いいかげんにしてよね！　また王様にでもなって、いばっている夢でも見たんでしょ。見てよ、これ。さっき夢の中で暴れていたわね。いやって言っているのに、殴ってくるし、何度もキスしてきて痛いわよ」

女は、あざの出来た腕を見せました。そこには、殴られたようなあざが、赤黒くなって数個ついていました。女は、驚いて瞬きを繰り返す殿様に、次々と言葉を浴びせました。

「夢の中で、また部長さんを殴ったの？　それとも殺したの？　今

日はどこの国の王様役？ あなたは、夢の中でしかいばれないかわいそうな人だから、ある程度は大目に見てきたけど、もうがまんできないいわ。今日という今日は、病院へ行ってもらうわよ。いいわね」金髪に染めた髪を振り乱し、唇を腫らし、目を吊り上げた妻の恐ろしい形相に、殿様、いいえ、自分が殿様になった夢を見ていた夫は、小さな声で「はい……」と返事をしました。蹴られた股間をおさえ、痛みで涙があふれそうな目をしながら、妻に心から謝罪したのでありました。

（おしまい）

~~~~~

お読みいただき、ありがとうございました。感想、評価をいただけるとうれしいです。

二〇〇九年一月 菜宮雪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8658f/>

---

バキュームな目覚め

2010年10月8日15時31分発行